

# 発 明 文 化 論

〈第 96 回〉

丸山 亮

## 杭 工 事 の 偽 装

横浜市の大型マンションで、支えの杭の一部が地盤の支持層に届いていなかったため、建物が傾いて大問題となった。別棟に渡る廊下の手すりはずれているのに気づいた住民の指摘で、住宅の販売会社が調査したところ、杭工事の欠陥と、施工の状況を示すデータの偽装が判明した。工事の信頼性が揺らぎ、同一施工業者が絡む全国の工事が見直される結果にまでなっている。こうした欠陥は施工後ただちに現れるわけではなく、今度の場合、10年ほど経過している。偽装は当初、特定の個人が意図的にしたものとしていたが、その個人とは無関係な北海道などの施工でも、偽装が見つかった。そうすると、建設業界に構造的なものであることがうかがえる。

今度の杭工事について、いま責任を取らされているのは、マンションの販売会社と建設を請け負った元請けの建設会社、そして直接現場で杭打ちを行った2次下請けの工事会社だ。この何層もの構造が責任の所在をあいまいにしているが、結局彼らが責任を分け合うことになるだろう。さらに工事を監督する立場にある行政や、安易な工事を容認する社会にも、責任がないとは言えない。

産業社会は分業を必然とし、一方で、部分を担う個人は達成感が得にくく、職業倫理を踏み外しやすくなっている。チャップリンの映画「モダンタイムズ」は、労働のパーツ化を早くから戯画として見せた例だろう。分業化が進んでいる建設の現場で、各人がどのように生きがいを持ってそれぞれの仕事に向き合えばいいのか、問いは続く。日光の東照宮ではいま陽明門の修理が行われおり、ここでは見えない部分にまでていねいな作業が求められていて、従事する職人たちの意識は高い。

設計と施工の乖離は、これまでも重大な事故につながる恐れを指摘されてきた。けれども施工の不備が問題化するのには、大事故が発生した時だけだった。今度のように、一か所のほころびが全国に飛び火するのは珍しい。事件そのものは不幸な出来事だが、同様なことが繰り返されないために、原因をとことん追求して再発の防止策にまで進むならば、雨降って地固まるのたとえの通りとなる。

下請け構造の多重化は、末端にコストや工期の過重な負担を強いることにつながる。見えない地中の杭打ち工事は、事前にボーリングを行い、地表から支持基盤までの厚さを推定しなければならない。その精度にはばらつきがあるから、実際の施工時に予想値と違った場合、臨機応変な対応が求められる。工期が決まっているとき、それが可能かどうか。また、掘削機のドリルで地盤に穴をあけ杭を打ち込むとき、ドリルの抵抗値が支持層に届いたかを教えてくれる。そのデータがうまく得られなかったとすると、作業員は他の杭のデータを転用してつじつまをあわせる誘惑に駆られないか。

データの偽造防止に、作業をビデオに記録して品質管理にあてたら、という提案もある。今度のような、マンションの全棟建て替えほど巨額な付けを回されるくらいなら、ビデオによる監視コストなど大したものではない。ただ、そこまで性悪説に立たなければならないのだろうか。

監督責任のある国や自治体も、データ提出の義務がない現状では、検査で偽装を見抜くのは難しいとして、新たな方策を探っている。

フォルクスワーゲンによる排ガス規制逃れの不正ソフト搭載問題、東洋ゴムによる防振ゴムの性能偽装など、国の内外で産業と社会の関係に亀裂を生じさせる不正が相次いでいる。いまは欠陥品を生まない品質管理のための新しい工夫、発明が求められているといえよう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)